

菊池短歌会

7月詠草

菊池野は青垣山にかこまれて「美人の寝姿」鞍岳
 かすむ 氏岡 百枝
 雨あとのやさしき土の草を引く一畳ほどの菊の狭
 畑 梅野かをり
 物干しにきじ鳩が来てよく鳴けり雨あがり日の差
 せる朝 梅田 昭子
 熱帯夜過ごせし朝の倦怠に刻む胡瓜の涼しみど
 り 黒田 衣子
 アマリリス純白大きく咲けばまた水栽培の不思議
 なる域 佐々木かつえ
 染まりゆく雲よりこころひき放し夕田に注ぐ用水
 を塞く 竹野美智代
 いささかの家事の負担は思ひつつ五十過ぎたる子
 の帰省待つ 中原ちえ子
 一筋の川は涸れゆく空梅雨の水ひた守る堰も乾き
 て 村上 咲江
 背を伸ばし横顔見せて答案書く少年すなはち彫
 像となる 古賀 次郎
 盥 蹴る赤子の足に力あり頭一つを吾にゆだねて
 川口すみ子

万句の里俳句会

7月句会

無造作に天草干して鳥の宿
 渡りくる父の追憶青田風 中路 郁子
 結界のごとく網戸の内に住む 小山 照子
 岩清水山の深さを手に掬ふ 北村 君子
 水打つて風の流れを変へにけり 丸山美代子
 一面にうねり初めたる青田かな 岩木 敬治
 羅漢像梅雨の最中に坐られし 打出 貞
 藤寝椅子父の好みし向きのまま 野中 公枝
 川幅を一気に広げ男梅雨 隈部 輝子
 雨去れば雨の恋しき暑さかな 田島 房子
 巢立ちたる燕とび交ふ御所通り 加藤 妙子
 母の忌や青葉木菟鳴く夜の寂し 北村 妙子
 平山 邦子

肥後狂句桜会

7月例会

そるが人間 欲があるけん騙さるる 藤野 清子
 思い出す 写真で笑いかくる母 小川 繁美
 はつとして 気付いた時はガッチャンコ 窪田 明德
 そるが人間 誰だつて命がおしか 中山 昌子
 思い出す サイパン島で散った友 安武 二山

泗水短歌会

7月詠草

そるが人間 一人ぼっちじゃ生きられん 狩野 本六
 はつとして アクセルの方踏んどらす 高倉 新米
 思い出す 飛ぶ鳥落としよった頃 太田 雄三
 そるが人間 付き合うほどに味のある 北村 竹刀
 思い出す 賑わいよった隈府町 光堀 善教
 そるが人間 やっぱ我が身が可愛いかつ 荒木 玄海
 はつとして バス追いかくる忘れ物ん 須藤 新生
 色づきて熟れて落ちたる梅拾い甘煮をつくりひと
 花咲かす 内田つね代
 「生き甲斐」と黒子の女微笑めり農の合間の瞳か
 がやかす 高藤タツノ
 平均寿命目ざして行こう転ばぬように今日七十六
 歳我誕生日 中山 定子
 新の盆あまた提灯燈しつつ径しるべしてお待ちし
 てます 福原美智子
 菜園に娘が育てているミニトマト鈴成り朱実朝もぐ
 たのし 藤本のり子
 羽根広げ花をさがすか夏の蝶田植えの済みし水面
 に光る 宮本 峯子

せせらぎ俳句会

7月例会

孫の箸うまくかからぬ冷ソーメン 五丁 義昭
 失明を免がれし妻と星祀る 内村 泊虹
 さまざまのくらし狂はせ遅れ梅雨 藤本 邦治
 今成りしばかりの茅の輪風くぐる 坂本まつえ
 半夏生の手招き嬉し朝散歩 内村 鈴子
 打水に跳石涼し夏座敷 服部 静子
 初蟬に箸を止めし朝餉かな 村山 数恵
 今朝の雷梅雨の上がりの知らせとも 吉岡 民子
 亡き母の日傘をまたもさしてみる 藤本アツ子
 風涼しナースマイル診療所 寺本 和子
 音もなく光っていたよいなづまが (小六) 渡辺 一史
 いなびかり光つても音は鳴らないな (小六) 渡辺 大寿

肥後狂句水笑会

7月例会

空梅雨 沈んだ村の浮かび出た 三水
 好きなくせ わざと離れて座つとる 五女

七城短歌会

7月詠草

気の利かん 聞こえんとかい咳払い 英 坊
 気の利かん 挨拶もせん茶も汲まん 水 光
 どうにでん家の嫁女にしゅうごたる 三代
 空梅雨紫陽花の色しらくとる 美 樹
 好きなくせ わざと嫌味ば言うちみる 江 彩
 好きなくせ 話しかけても知らん振り 義 雄
 思いもよらん 掘つたら温泉湧いて出た 寛 べ

旭志文芸俳句会

7月詠草

咲きのぼり最後のグラジオラスの一輪に飛び来し
 蝶が羽たたみたり 吉岡 充子
 荒雨に打たれて向日葵が倒れしも我諦めず雨上が
 ればと 池田カツ子
 孫娘が命懸けての優勝戦われ手を合わす神に頼み
 て 緒方 寛子
 明け易さ心にあまることばかり 芹川のり子
 ゴールして抱き合う子等汗まみれ 中尾ヨシコ
 薫風のそよぎて招く大阿蘇野 東 由香
 守宮楼む厨の朝の忙しき 岩根 良子
 暁の空に声のみ不如帰 中山 栄子
 太き牙のマンモスのをる日本夏 芹川 蓉子
 かの山に棟檀あるらし薄紫の 工藤 房子
 ほととぎす我も句会にいそいと 出田みどり
 風鈴は一つもなく子沢山 岩根サチ子
 夫遺影大輪百合の中に笑む 東 芳子
 雨待ちの棚田の畔や夏あざみ 水谷 ミネ